

別子銅山のあゆみ

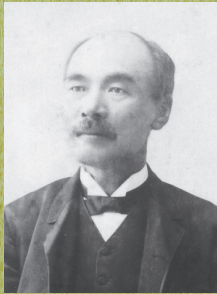
別子銅山の歴史は、元禄3年(1690)別子山中における露頭の発見に始まります。翌年、住友家による別子銅山請負稼行が幕府により認可され、以後昭和48年(1973)の閉山まで283年にわたり採掘が行われ、江戸時代から昭和に至る日本経済を支えるとともに産業の近代化の礎を築いた世界的に知られた鉱山でした。その間、世界にも例がない一企業による採掘が続けられ、その採鉱跡などが、貴重な近代化産業遺産群となっています。また、煙害対策や植林事業など環境への配慮がとられるなど、多くのことを学ぶことができます。

別子銅山近代化産業遺産群は、新居浜を始め四国中央市、西条市、今治市及び上島町の東予地域全域にまたがっており、地域全体の魅力ある地域資源となっています。別子銅山案内マップは、現存する別子銅山産業遺産の紹介と、産業遺産を通じた日本社会の近代化と別子銅山に人生を捧げた先人の英知と苦難の歴史、学術的価値などを合わせて学んでいただくために作成しました。

別子銅山を支えた人々

ひろ せ さい へい

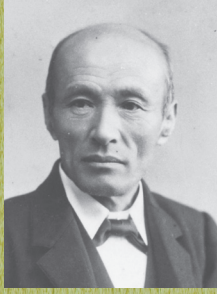
広瀬 幸平 一別子銅山近代化の祖－[初代住友総理事(総理代人・総理人)]



(住友史料館所蔵)

い ば てい こう

伊庭 貞剛 一環境対策の先駆者－[2代目住友総理事]



(住友史料館所蔵)

すず き ま さ や

鈴木馬左也 一国家百年の事業－[3代目住友総理事]



(住友史料館所蔵)

わし お か げ じ

鷲尾勘解治 一企業と地域の共存共栄－[住友別子鉱山(常務取締役)]



マイントピア別子

昭和5年から昭和48年まで別子銅山の最後の採鉱本部があった場所に、別子銅山観光ランドとして、端出場記念館、鉱山鉄道、観光坑道や住友の接待館であった泉亭等特別室棟などがあります。

お問い合わせ (株)マイントピア別子
〒792-0846 新居浜市立川町707-3 電話 0897-43-1801 FAX 0897-43-4020

別子銅山略年表

西暦	元 号	～「別子銅山」関係～	～大阪関係～
1691	元禄 4年	別子銅山開坑	
1702	元禄 15年	別子銅山永代請負、新居浜口屋(浜番)設置	
1828	文政 11年	広瀬幸平生誕	
1847	弘化 4年	伊庭貞剛生誕	
1865	慶応 元年	広瀬、別子支配人となる	
1868	明治 元年	事業継続を新政府へ嘆願、許可	
1869	明治 2年	精錬所が大阪長堀から立川へ移転	
1874	明治 7年	フランス技師ルイ・ラロック雇用	
1876	明治 9年	東延斜坑開さく(1895完成)	
1877	明治 10年	広瀬、総理代人就任(明治15年、総理人に改称)	
1878	明治 11年		
1880	明治 13年	ダイナマイト使用実験成功、牛車道完成	広瀬、五代友厚らと大阪株式取引所、大阪商法会議所を設立
1881	明治 14年	松方デフレにより、別子起業案の見直し	伊庭、住友大阪本店支配人に就任
1882	明治 15年	第一通洞と小足谷疏水道でダイナマイト本格使用	伊庭、大阪商業講習所(府立大阪商業学校の前身)の設立委員となる
1884	明治 17年	新居浜惣開製錬所で実験炉試験成功	広瀬、五代友厚らと大阪製銅会社を設立、初代社長
1886	明治 19年	第一通洞開通	広瀬、五代友厚らと関西貿易会社を設立、副総監就任
1888	明治 21年	新居浜惣開製錬所・山根浸式製錬所、操業開始	伊庭、大阪商業講習所の所長となる
1890	明治 23年	別子銅山工作方(現・住友重機械工業)設置	伊庭、大阪商船会社設立発起人となる
1891	明治 24年	高架索道(石ヶ山丈一端出場間)完成、削岩機導入	伊庭、有志と大阪紡績株式会社(現・東洋紡)創設、重役となる
1892	明治 25年		広瀬、大阪商船会社設立、初代頭取となる
1893	明治 26年	専用鉄道(下部：惣開～端出場間、上部：石ヶ山丈～角石原間)開通	伊庭、大阪商船会社の取締役となる
1894	明治 27年	伊庭、別子鉱山支配人となる	伊庭、府立大阪商業学校(のちの大阪市立大学)校長となる
1895	明治 28年	煙害問題等により、山根製錬所廃止	
1897	明治 30年	四阪島への製錬所移転に着手	
1898	明治 31年	別子鉱山・山林課(現・住友林業)設置	
1899	明治 32年	鈴木馬左也、別子鉱業所支配人となる	
1900	明治 33年	伊庭、住友総理事に就任	
1902	明治 35年	第三通洞開通	
1904	明治 37年	鈴木、住友総理事に就任	住友家、大阪中之島図書館を寄付
1905	明治 38年	四阪島製錬所操業開始	
1911	明治 44年	日浦通洞開通、第三通洞と繋がる上部鉄道廃止	
1912	明治 45年	端出場水力発電所完成	
1913	大正 2年	住友肥料製造所(現、住友化学)設立	
1915	大正 4年	第四通洞開通	
1916	大正 5年	採鉱本部を東延から東平に移転	
1919	大正 8年	土佐吉野川水力電気(株)(現、住友共同電力)設立	鈴木、大阪北港(現・住友商事)設立
1927	昭和 2年	鷲尾勘解治、住友別子鉱山(株)の常務取締役となる	
1930	昭和 5年	採鉱本部を東平から端出場に移転	
1937	昭和 12年	泉亭等(住友5社共同施設)完成 (現、別子銅山記念図書館敷地)	
1939	昭和 14年	四阪島製錬所に中和工場完成 煙害問題完全解決	
1960	昭和 35年	大斜坑開さく着手(1969完成)	
1973	昭和 48年	浅津坑終掘、別子銅山閉山	

学習拠点施設

広瀬歴史記念館

銅山の近代化を進めた住友初代総理事広瀬幸平の顕彰施設。国の重要文化財・名勝である旧広瀬邸が隣接している。

入館料：個人550円、団体(20名以上)440円、18歳未満及び大学生等無料(開館時間：午前9時30分から午後5時30まで(入場 午後5時5まで))

休館日：月曜日、国民の祝日の翌日(日曜日を除く)、12/29～1/3



住友化学歴史資料館

(国の登録有形文化財)旧住友銀行新居浜支店(明治34年(1901)竣工)を活用して、平成2年(1990)に開設。世界的にも珍しい化学の歴史資料が展示。施設観覧は直接問い合わせ。



日暮別邸記念館

明治39年(1906)に住友家の別邸として四阪島に建設された洋館を、平成30年(2018)に住友グループが移築復元。別子銅山近代化により発生した煙害問題克服の歴史を中心に伝える記念館として、一般公開されている。

入館料：無料(開館時間：午前9時から午後4時30分まで)

休館日：月曜日、国民の祝日(日曜日の場合は開館)、10/17・18、12/29～1/3



別子銅山記念館

別子銅山の意義を永く後世に伝えるために、住友グループにより昭和50年(1975)に開設・運営されている。開坑記念日である5/9の正午に太陽の光が差し込む仕掛けがある。

入館料：無料(開館時間：午前9時から午後4時30分まで)

休館日：月曜日、国民の祝日(日曜日の場合は開館)、10/17・18、12/29～1/3



フォレストハウス

植林用の苗畑があった「住友の植林事業ゆかりの地」(別子山中七番)に開設。過去から未来につながる持続可能な森林経営、住友林業グループの事業について学ぶことができる。

入館料：無料(開館時間：午前10時から午後4時まで)

休館日：月曜日、火曜日、12月から2月冬季閉館



四国新居浜 別子銅山案内マップ

平成23年4月 初版発行

令和 8年3月 第13版(改訂版)発行

編集 新居浜市 別子銅山文化遺産課

【参考文献】

「住友別子鉱山史」上巻・下巻・別巻

(住友金属鉱山株式会社 1990年)

末岡照彦監修「未来への鉱脈－別子銅山と近代化遺産－」(新居浜市 1999年)

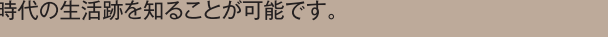
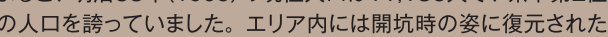
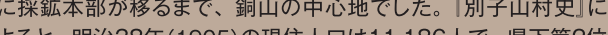
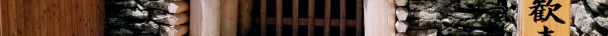
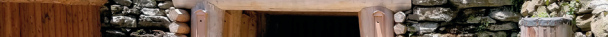
「愛媛県近代化遺産－近代化をひめ歴史遺産総合調査報告書－」(愛媛県教育委員会 平成25年3月)

東平エリア

東平は標高750mの山中に位置し、明治35年(1902)の第三通洞の貫通を契機に、大正5年(1916)から昭和5年(1930)まで採鉱本部が置かれました。最盛期には約5,000人も人口がありました。昭和43年の東平坑の閉坑により人々は離れましたが、選鉱場／貯鉱庫、索道停車場、インクラインなどの跡や第三通洞、第三変電所など多数の産業遺産(裏面参照)が残っています。現在は、「マイントピア別子 東平ゾーン」として歴史資料館などが整備され、「東洋のマチュピチュ」として人気の観光スポットとなっています。

東平歴史資料館

入館料：無料
開館時間：午前10時～午後5時
休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)、12月から翌2月



うわばら やまね

上原・山根エリア

居宅であった旧広瀬邸(重要文化財・名勝)、併設して広瀬の顕彰施設である広瀬歴史記念館があります。また、山根製錬所跡には小高い丘に旧製錬所の煙突が残り、別子銅山記念館があります。記念館屋外には、別子鉱山鉄道の機関車も展示されています。



しきかじま

四阪島エリア

四阪島(今治市)は、新居浜市の沖合約20kmの瀬戸内海に位置します。新居浜の製錬所から出る煙害問題に対処するため、別子銅山支配人であった伊庭貞剛が、明治29年(1896)に製錬所の移転を計画、明治38年1月から操業が開始されました。移転に要した費用は、173万円で別子鉱業所の2年分の純利益に相当。昭和51年(1976)まで製錬が行われました。かつて島には、大正13年(1924)竣工の高さ71.5mの煙突があり、長年周辺を航行する船舶のランドマークになっていましたが、平成25年に撤去されました。銅製錬工場は今般化亜鉛の製造工場として稼働中で、毎日、新居浜港から従業員と水運ぶ船が出ています。



ほしこえ

星越エリア

星越エリアは、大正14年(1925)に設置された新居浜選鉱場を中心として開発されたエリアです。別子鉱山鉄道の星越駅が置かれることにより、国内では早い時点で、の、当時理想とされた田園都市構想を実現した「職住分離」の幹部職員の社宅群が建設されました。昭和4年に鉱山鉄道が一般客も利用できる地方鉄道になったため、星越駅で国鉄の切符も買えるようになりました。住友山田社宅は、平均100坪を超える生垣に囲まれた一戸建て住宅が連なり、平成21年当時、「国内最後の社宅群」と呼ばれていました。現在は別子鉱業所長社宅、外国人社宅など6棟がほぼ当初のまま残されています。周辺は、星越トンネル、太鼓橋、旧新居浜選鉱場、改修後の星越駅などの産業遺産のほか、平成30年10月に移築された日暮別邸記念館があります。



たつかわ

立川・端出場エリア

(1973)の閉山まで採鉱本部が置かれました。現在、「マイントピア別子 端出場ゾーン」として観光坑道などが整備され、多くの家族連れなどで賑わっています。国の登録有形文化財となっている旧別子鉱山鉄道端出場鉄橋や隧道のほか、第四通洞などの産業遺産が敷地内に残っています。対岸には、明治45年に操業が開始された旧端出場水力発電所の煉瓦造りの建物があり、中にはドイツ・シーメンス社製の発電機をはじめとした操業時の発電関係機器がそのまま残っており、大変貴重な産業遺産となっています。

